

文化の発信 誰が何を？

—自己像と他者像の拡大に向けて

筑波大学
上田 浩二



「文化交流」における文化交流とは何か。予測不可能なことはしばしば文化の所為にされる。文化は所与であるが、裏に何か分らない部分がある存在だと考えられている。それゆえに文化交流が

必要となるのだが、文化の良し悪しや国内の文化状況よりも、自分たちが理解され、共感を得られることを求めがちだ。そして交流そのものは常に無批判に扱われる。

担い手と場とで文化交流を分類すると、国内では個人・民間主体のものが多く、理想主義的で、他国の紹介が好まれる。資金は自己負担で、内容は自由だ。国外では、国家・公的機関が財源を用いて行う活動が多く、政策的な視点から一定の枠組みが課され、自国紹介が主だ。

理解や共感を得ることを目的としても乖離が生じることもある。例として京都のゲーテ・インスティトゥートの図書館蔵書に対するコール首相の怒りやケルン日本文化会館蔵

長時代に受けたクール・ジャパン事業実施要請と国外における政府関与への違和感の視線、日本人の自己像の曖昧さが対外的に何を提供するかに迷いを生じさせている問題などを挙げる事ができる。とりわけ、自分が作ったわけではなく伝承してきただけの伝統文化をどのような位置づけで紹介するかという点や、日本の文化交流がクール・ジャパンと伝統文化に分化している点、日本のイメージも極度に両極分裂している現状は再考の余地がある。日本の歌舞伎とドイツのオペラの海外公演では、費用負担も対照的だ。本来ならば鏡写しになるはずの自己像と他者像が機能してない。個人、国家ともに日本は、他者の目から見た自文化の特殊性を深く理解することが今後の課題となる。

また文化交流における言語の役割について掘り下げることも課題である。実用的であるがゆえに文化として認知されにくく、長期的に習得しなければならないため単発の催しもし辛い。そのため言語教育は国際文化交流における文化から抜け落ちがちなのである。

Profile
上田 浩二
UEDA, Koji

● 筑波大学名誉教授。ドイツ語学院ハイデルベルク院長。早稲田大学教授、筑波大学教授、ベルリン自由大学、ウイーン大学客員教授、獨協大学特任教授を歴任。NHKのT.V.ラジオドイツ語講座も担当し、ゲーテ・インスティトゥート等で通訳・翻訳の後継者養成も行う。ベルリン日独センター日本側代表、国際交流基金のケルン日本文化会館館長として文化交流の実務に携わる。著書に「よそのもの」の作つたウイーン、「戦時下日本のドイツ人たち」等。